

英語の述部名詞に見られる特異な一致現象*

猪 熊 作 巳

1 はじめに

本稿では、英語の述部位置に生起する名詞が示す特異な数の一致現象を報告し、その形態統語的分析の方向性を素描する。述部と主語名詞句のあいだで成り立つ統語的一致 (Agree) が理論的関心の中心ではあるが、本稿で展開する議論は、定形動詞が示す一致特性と述語名詞句が示す一致特性の異同という古典的問題や、いわゆる共格の *with* の取り扱いといった問題にも関わるものである。

2 Friends 構文

名詞句が述語として用いられる際、その数は主語名詞句の数と一致するのが原則である。

- (1) a. I am a student of linguistics.
 b. *I am students of linguistics.
- (2) a. *They are a student of linguistics.
 b. They are students of linguistics.

このような主語・述語名詞間的一致関係は、一見したところ主語と定形動詞の一致関係と並行的に見える¹。

- (3) a. He plays soccer.
 b. *He play soccer.
- (4) a. *They plays soccer.
 b. They play soccer.

ところが、特定のクラスの名詞が述語として用いられた場合、主語の数との不一致が現れる。(5b) のように、述語に *friend* のような「役割名詞 (role nouns; Huddleston & Pullum (2002))」が生起する際、主語名詞句が単数であってもその述語名詞は複数でなければならない。述語名詞を単数に一致させた文

は (5a) の通り非文となる (以下、(5b) タイプの構造を *friends* 構文と呼ぶことにする)。

- (5) a. *I am a friend with Mary.
 b. I am friends with Mary.
 c. I am a friend. (Kayne (1994 : 63))
 d. *I am friends.

これは *friend* という名詞と *with* という前置詞の共起可能性のような、語彙的特異性やコロケーションによるものではない。

- (6) I have a friend with long hair.

また、主語名詞句と述語動詞のあいだではこのような一致関係は許容されない。(5b) のような名詞句述語文においても、(7a) のような動詞句述語文においても、主語の名詞句と *with* 目的語の名詞句が意味解釈上は並列構造 (8) に近似しているという点で共通しているが、動詞句述語文において動詞の数を複数に一致させることはできない。

- (7) a. Tom agrees with Greg.
 b. *Tom agree with Greg.
 (8) a. Mary and I are friends.
 b. Tom and Greg agree (with each other).

この点は、(5b) の *be* 動詞を複数一致させることができないことから明らかである。

- (9) *I are friends with Mary.

したがって、名詞句述語文における主語名詞句と述語名詞句のあいだの数一致 (number agreement) には、主語名詞句と述語動詞句のあいだの一致とは異なる仕組みが働いていると考えざるを得ない。

このような特異な不一致現象としておそらくもっとも知られているのは、イギリス英語で観察される、いわゆる意味的一致 (semantic agreement) だろう。意味的一致とは、主語に *family* や *team*、*committee* といった集合名詞の単数形が

用いられる際、述語の数に関して単数と複数の揺れが見られる現象である。

- (10) a. My family are all open-minded people.
 b. My family has two houses. (久野・高見 (2009: 122))

インフォーマルな説明としては、これらの集合名詞を用いる際に、話者の意識がその構成員一人一人に向いている場合、*family*が(形態的には単数にもかかわらず)複数と認識され、それに応じて述語の数も(10a)のように複数形で一致するが、単一の集合体として認識される場合は単数一致が許容される(10b)、というものである(久野・高見(2009))ⁱⁱ。

一見したところ(5b)と(10a)のあいだには、単数の主語に対して複数形の述語が生起しているという点で共通点があるように思われるかもしれないが、この一般化が誤りであることはすぐに確認できる。第一に、(10a)における主語*my family*は形態的には確かに単数であるものの、意味的には個人の集合をあらわす。このようないわば意味の二重性は、(5b)の主語である*I*には見られない。そして前述の通り、(10a)で複数一致を示すのは(述語名詞*people*に加え)be動詞であるが、(5b)において複数一致を示すのは述語名詞のみであり、be動詞は単数形しか認可されない(9)を参照)。

Huddleston & Pullum(2002: 513)も指摘している通り、述語名詞句の数形態(number morphology)は主語名詞句と一致しないケースが多々あり、「文法規則の例外として処理できるものではない」ⁱⁱⁱ。Huddleston & Pullumはこの立場から、むしろ数の不一致が容認不可能性をもたらすケースに対して意味論的な説明を与えるほうが望ましいとしている^{iv}。ただしHuddleston & Pullum(2002: Chapter 5, Sections 18-19)による数の(不)一致現象についての議論の中で*friends*構文は紹介されていないこと、そして彼らの取り上げている現象と異なり、(5b)では異なる話者や異なる文脈によって判断に揺れが見られない—つまり文法規則によって統べられている—ことを考慮すると、これを意味論的な説明によって処理することは賢明ではない。

3 述語タイプと並列構造

本節では、*friends*構文の分析の中核となる二つの要因として、述語の対称性と並列構造について取り上げる。

3.1 対称的述語 (Symmetric predicates)

Friends 構文に生起可能な語彙項目は *friends* だけではなく、相互的対称性の成り立つ関係を意味する要素であれば可能である (12)。ここでは、相互的対称性を (11) のように定義しておく (cf. Lakoff & Peters (1969))。

(11) 相互的対称性

「AがBのRである」が真であれば必ず「BがAのRである」が真となるとき、関係Rは相互的対称である。

- (12) a. I am colleagues with John.
 b. I am partners with Juergen.
 c. I'm teammates with Jake.
 d. He's twins with Greg.

相互的対称性の成立しない名詞を friends 構文に用いると非文となる。

- (13) a. *I am linguists with Shunichiro.
 (*Intended: Shunichiro and I are linguists.*)
 b. *I am fathers with Koya.
 (*Intended: Koya and I are fathers.*)

たとえ対称的述語であっても、その解釈がいわゆる外的関係の場合は friends 構文としては認可されない。

- (14) a. John has a colleague. Rick has a colleague, too.
 ≠John is colleagues with Rick.
 b. John is Rick's colleague, and (needless to say,) Rick is John colleague.
 =John is colleagues with Rick.

したがって、friends 構文に生起しうる述語名詞は相互的対称性を備えた要素でなければならない。

3.2 共格 (comitative) の *with* と並列 (coordination) の *and*

Friends 構文の認可には、述語名詞の相互的対称性だけでなく、前置詞 *with* の生起も必須である ((5c-d) も参照)。

- (15) a. Keiko is friends with Haruko.
 b. Keiko is Haruko's friend.
 c. *Keiko is Haruko's friends.
 d. *Keiko is friends of Haruko('s).
 e. *Keiko is friends to Haruko.

これらの事実からも、*friends* 構文を Huddleston & Pullum (2002) のいうように意味や文脈的要因のみで説明することは妥当ではないことが示唆される。

英語において、共格 (comitative) の *with* と並列の *and* が類似性を示すことは古くから指摘されてきた (Lakoff & Peters (1969)、Kayne (1994))。つまり、*friends* 構文は、なんらかの側面で *and* を用いた (16) のような表現と類似している。

- (16) Juergen and Jake are friends/colleagues.

ただし *and* 並列には、*friends* 構文のような相互的対称性の制約は課されない。したがって (17) のような表現も適格である。

- (17) a. Sakumi and Shunichiro are linguists.
 b. Sakumi and Shunichiro are fathers.

さらに (16) と (17) では、*both* との生起可能性に相違が見られる (Lakoff & Peters (1969))^{vi}。

- (18) a. *Both Juergen and Jake are friends/colleagues.
 b. Both Sakumi and Shunichiro are linguists.

Lakoff & Peters は両者の違いを、句レベルの等位と節レベルの等位に異なる構造を与えることによって説明する。すなわち、(17) のような構造は、(19a) のような節レベルの等位に変形操作が適用された結果派生されたものだと考える。

- (19) a. John is erudite and Mary is erudite.
 b. John and Mary are erudite. (Lakoff & Peters (1969 : 113))
 c. Both John and Mary are erudite.

- (20) a. *John is alike and Mary is alike.
 b. John and Mary are alike. (Ibid.)
 c. *Both John and Mary are alike.

*Alike*のような対称的述語ではそもそも(20a)のような節レベル並列が認可されず、これが(20c)の非文性を説明することになる。

同様の観察が*friends*構文にも可能である。*Friends*構文、およびそれに対応する*and*並列に*both*を共起させることはできない。

- (21) a. John is friends with Mary.
 b. John and Mary are friends.
 c. ≠John is a friend and Mary is a friend.
 d. *Both John and Mary are friends.

したがって、(21a)のような*with*を伴う*friends*構文は、(20b)のような句レベルの*and*並列との並行性を見せる、ということができただろう。実際、(21a)の*friends*構文と、(21b)の句レベル並列とのあいだに解釈上の明らかな違いは確認できない。

とはいえ少なくとも英語において、共格の*with*と並列の*and*の両者をまったく同一のものととらえることができないことも明らかである。

- (22) a. John is friends with Mary.
 b. *John is friends and Mary.
 c. *John and Mary is friends.
 d. John and Mary are friends.
 e. *John with Mary is friends.
 f. *John with Mary are friends.

次節では、*friends*構文の統語分析についてこれまでになされた提案を検証し、それがもたらす理論的関心と、射程に入れるべき現象を整理していく。

4 並列構造と述語名詞句の数

4.1 *With*句の基底構造：Kayne (1994)

Kayne(1994: 63-66)はLakoff & Peters(1969)の着想に基づいたうえでその

分析に修正を加え、問題の*with*句は*and*句と同様の基底構造を持つと主張する。

- (23) a. [_{&P} NP [*and* NP]]
 b. [_{withP} NP [*with* NP]]

Lakoff & Peters (1969) は、句レベルの*with*句は [NP *and* NP] という並列構造として基底生成され、その後の変形規則によって*and*が*with*へと変換、そして最後に*with* NPが右方移動を受けることによって派生されると主張した。当然このような右方移動はKayne (1994) のLCAの元では認められないため、Kayneはいわば派生のプロセスを逆転させ、[NP₁ *with* NP₂] として基底生成された構造からNP₁が(左方へ) 摘出されることによって*with* NPが派生されるとしたのである。Kayneによれば、この等位構造と、VP内部主語構造 (Fukui & Speas (1986)、Koopman & Sportiche (1991) など参照) の連関によって、(24) の構造は (25) のような基底構造から派生される^{vii}。

- (24) a. John *and* Bill collided.
 b. John collided *with* Bill.
 (25) a. [_{IP} [_{&P} John *and* Bill] INFL [_{FP} collided [_{VP} [_{&P} John [*and* Bill]] collided]]]
 b. [_{IP} [_{NP} John] INFL [_{FP} collided [_{VP} [_{withP} John [*with* Bill]] collided]]]

このように考えると、*and*並列と*with*並列の違いは第一項NPの認可可能性、あるいはそのコインの裏としての摘出可能性に帰結することになる。そして(25b)におけるNP *John*の主語位置への移動は、明らかに格認可を動機としているだろう。二つの並列構造の違いは、*and*並列を構成するNPは、その& P内部にとどまったまま格認可される一方、*with*並列を構成するNPは*withP*外部に移動することで格認可を受けなければならない、というかたちで述べ直される。

Friends構文についても、基本的には同じスタイルで説明が与えられる。ただし*friends*構文における述語は動詞句VPではなく名詞句NPと考えられるため、この述語NPのSpecに「主語」が基底生成されることになる。したがってVP内主語仮説は述語内主語仮説 (Predicate Internal Subject Hypothesis PISH ; Koopman & Sportiche (1991)、Hornstein et al. (2005 : 80)) と一般化したほうが適切である^{viii}。

- (26) a. Tom *and* Mary are friends.
 b. [_{IP} [_{&P} Tom *and* Mary] are-INFL [_{FP} friends [_{NP} [_{&P} Tom [*and* Mary]] friends]]]

- (27) a. Tom is friends with Mary.
 b. [IP [NP Tom] is-INFL [FP friends [NP [withP Tom [with Mary]] friends]]]

格認可に関する *and* と *with* の違いは、近年の並列に対する統語分析にも関わってくる (Chomsky (2013, 2015)、Tsoulas (2020) など参照)。(25a) の &P の移動から見て取れる通り、NP の並列から構成される &P は、それ全体として格位置—このケースでは主語位置—へと移動することで認可される。逆にいえば、&P 内部には格認可子 (Case licensor) が存在せず、かつ、*and* という語彙項目自体は外部の格認可子—このケースでは INFL—から見ると透明 (transparent) であるということだ^{ix}。一方で (23b) のように、*with* 並列を構成する二つの NP は格認可に関して不均等である。つまり *with* に後続する NP—このケースでは *Bill*—は *with* によって格認可されるのに対し、先行する NP—このケースでは *John*—は *withP* 内部では格認可されず、外部への移動が強制される。

この文脈で、次の (28) のような事例は興味深い (cf. (22e, f))。

- (28) a. a photo of Charles with his dog (Freidin 2012 : 59)
 b. There's a statue of Saigo with his dog in Ueno Park.

意味的に考えて下線部が単一の構成素をなしていることは間違いないが、*Charles* や *Saigo* といった固有名が PP による修飾を受けるとは考えにくい。したがってこれらの構成素の主要部は *Charles/Saigo* ではなく *with* であると考えられるが、そうするとこれら固有名の格認可が問題となる。前置詞 *of* が *with* 句の第 1 項を認可しているのであれば、この構造は一種の例外適格付与 (ECM) 構造として分析できるかもしれない。

もし *and* の格透明性が統語対象のラベリング機構に関係しているとする、Chomsky (2013, 2015) が示唆する通り、等位構造は X バー理論が内在していた内心性 (endocentricity) という理論的構築物を完全に否定する経験的根拠となりうるし、この透明性に言語間変異が観察されるなら、Tsoulas (2020) が主張する通り、並列構造に関わるラベリングや格認可特性のパラメタ化の可能性が見えてくる。

この方向性の一つの経験的関心として、*with* 並列における随伴現象 (pied-piping) の有無が挙げられるだろう。ここで紹介している議論にしたがうと、*with* 並列において第一項 NP のみが抽出されることには説明が与えられるが、一方でこの説明は、*with* + 第二項 NP が随伴されて第一項 NP とともに抽出される可能性を排除しない。したがって通言語的には、[NP *with* NP] に対応する句

が— (25a) の&Pの移動と同様に—全体として移動する事例が観察されてもおかしくない。Tsoulas (2020) はこの観点からギリシャ語と英語の比較をおこなっており、共格についてはポーランド語やロシア語、さらには日本語との比較も視野に入ってくる（前者についてはMcNally (1993) やDyła & Feldman (2008)、日本語についてはKuno (1973) やTatsumi & Fujiwara (2018) などを参照）。

4.2 述語名詞の数素性

前節ではおもに*and*や*with*を中心として構成される並列構造について議論した。本節では述語名詞の数素性、すなわち主語名詞句が単数であるにもかかわらず複数形態を帯びる点について検討する。

すでに見た通り、単数名詞句を主語にとる friends 構文では、常に繫辞 *be* と述語名詞の数形態に乖離が生じる。繫辞は主語名詞句に一致して単数形を帯びる一方、述語名詞は並列名詞句全体に一致して単数形を帯びる。繫辞については、(26-27) に挙げた構造を受け入れれば、一般的な一致操作によって説明できるだろう。模式的に述べるなら、(27a) の構造は (29) のような派生ステップを踏むと考えられる。

- (29) a. [Tom [with Mary]] Construct *with*-phrase
 b. [[Tom [with Mary]] friends] Merge (29a) with *friends*
 c. [friends [[Tom [with Mary]] friends]] Head-move *friends* to F⁰
 d. [is [friends [[Tom [with Mary]] friends]]] Merge (29c) with copula
 e. [Tom [is [friends [[Tom [with Mary]] friends]]]] Move *Tom* to Spec-IP

この派生ステップにもいくつか説明を要するポイントは残る。例えば、(29c) の主要部移動を動機づける因子はなにか。そして、(29e) の *Tom* の移動は INFL (あるいは T) との probe-goal 関係を通じて生じると考えられるが、この際に *friends* はいわゆる defective intervention (Chomsky (2000)) を引き起こすことはないのか。いずれの疑問についても本稿で議論する余裕はないが、前者については、この機能範疇 FP を PredP あるいは vP のような叙述 (Predication) を成立させる範疇と考えておく^{*}。後者については、この構造における *friends* は項ではなく述語として機能しており、したがって典型的な Defective intervention を引き起こすような不活化 (inactivate) された格素性をそもそも持ち合わせていない、と考えることとする。

やはり問題は述語名詞の複数形態であるが、これについても (29) の派生ステップを考えることで方向性が見えてくる。この派生において、複数の名詞を

含む *with* 句と述語 *friends* が特定の構造関係に入るのは、(29b) のステップ、つまり両者が外的併合 (External Merge EM) されるステップのみである。EM が意味的選択 (Select) によって駆動されるのであれば (Chomsky (2000))、問題の *with* 句と併合される述語名詞 *friends* が複数形を帯びることも驚きではない。あるいは Carstens (2000) などのラインに沿って、名詞句内部にも節構造に準じた素性照合 (feature checking) / 素性値付与 (feature valuation) メカニズムを想定することもできる。(29c) のステップで、述語名詞句がもつ解釈不可能素性—おそらく数素性 [_number]—が主語名詞の *with* 句と一致関係を結ぶ。しかし述語名詞句は ϕ 不完全 (ϕ -incomplete; Chomsky (2000, 2001)) であるため、この関係はいわゆる defective agreement となる。結果、主語名詞句の格素性は不活化されず、(29d) のステップにおいて主節の T から可視的となる^{xi}。

主節の T に位置する繫辞と名詞句の併合 (ステップ (29e)) は上述の通り probe-goal 関係によって、つまり内的併合 (Internal Merge IM) によって成立するので、純粹に形態統語的特徴—今のケースでは名詞句 *Tom* が持つ単数素性—が繫辞の形態を決定するわけである。

では *and* 並列の場合はどうなるだろうか。(29) の派生にならってみると、(30) のような派生ステップが考えられる。

- (30) a. [Tom [and Mary]] Construct *and*-phrase
 b. [[Tom [and Mary]] friends] Merge (30a) with *friends*
 c. [friends [[Tom [and Mary]] friends]] Head-move *friends* to F⁰
 d. [are [friends [[Tom [and Mary]] friends]]] Merge (30c) with copula
 e. [[Tom [and Mary]] [are [friends [~~Tom~~ [and ~~Mary~~] friends]]]]
 Move *Tom and Mary* to Spec-IP

with 並列と異なるのは、最後のステップ (30e) のみである。*with* 並列では、*Mary* は *with* によって格認可され不活化されるため *Tom* のみが T による探索対象となるのに対し、*and* 並列では *and* の格透明性のため *Tom* と *Mary* 双方が T の探索対象となり、&P 全体が Spec-IP へと移動する。こうして、(29e) では *Tom* の格素性が、(30e) では *Mary* の格素性が認可されず、排除されることになる。

- (29) e'. [[**Tom** [with Mary]] [is [friends [[~~Tom~~ [with ~~Mary~~] friends]]]]]
 (30) e'. [[Tom]] [are [friends [[~~Tom~~ [and **Mary**]] friends]]]]

5 まとめと残る課題

本稿では、主語名詞句が単数であるにもかかわらず複数形での実現が強制されるFriends構文に対して、述語名詞の意味クラス（相互的対称性）、共格による並列、probe-goalによる一致とSelectによる一致の区別の三点を軸に素描してきた。技術的詳細に不十分な箇所は多々残るが、述語名詞の数素性という古からの理論的難題に対して、friends構文というごく日常的な表現が分析のヒントを提供してくれる可能性については確かだろう。

最後に、本稿の路線で分析を積み上げていくにあたって問題となる事例を報告しておく。本稿の基本的なアイデアは、述語名詞のSpecに基底生成される並列句との意味的整合性によって、その述語名詞自体の数形態が決定される、そしてその一方で、主節の時制辞T（本稿では繫辞によって代表させた）の数形態は、Tからの探索対象となる名詞句の数素性によって決定される、というものであった。この考え方に基づくと、述語名詞が集合名詞であるケースについても、Friends構文と並行的な結果を予測する。つまり、(31b)のような構造が、(31a)と同様に適格であることを予測する。

- (31) a. Tom and Nancy are a couple.
b. *Tom is a couple with Nancy.

両者の派生は以下のような流れになる^{xii}。

- (32) a. [Tom [and Nancy]]
b. [[Tom [and Nancy]] [a couple]]
c. [[a couple] [[Tom [and Nancy]]] [a couple]]
d. [are [[a couple] [[Tom [and Nancy]]] [a couple]]]
e. [[Tom [and Nancy]] [are [[a couple] [[Tom [and Nancy]]] [a couple]]]]]
(33) a. [Tom [with Nancy]]
b. [[Tom [with Nancy]] [a couple]]
c. [[a couple] [[Tom [with Nancy]]] [a couple]]
d. [is [[a couple] [[Tom [with Nancy]]] [a couple]]]
e. [Tom [is [[a couple] [[Tom [with Nancy]]] [a couple]]]]]]

*couple*や*team*、*group*といったいわゆる集合名詞は、内在的に複数の対象を指す。だからこそ、(31a)のように主語が複数を指示する名詞句である場合でも、述

語名詞として *a couple* という単数を帯びて生起することが可能だと説明されるわけだ。であるならば、(31b) のような *with* 並列においても [*Tom with Nancy*] という複数指示の *with* 句と *a couple* が基底の NP 構造内で叙述関係を成立させたのち、*Tom* のみが格認可の要請によって T の探索対象となり、(33) のような派生を経て適格となってしかるべきではないか。この予測に反して、(31b) は非文である。

いうまでもなく、「主語名詞の *Tom* が単数指示であるのに対して *couple* は集合名詞だから意味的に合致しない」というかたちの説明は成り立たない。Friends 構文は、まさにこの不一致を許容する構文だからだ。

つまるところ、(29) の派生と (33) の派生の違いは、述語名詞が形態統語的に複数形を取っているか (29)、意味的・内在的に複数を指示するものの、形態統語的には単数形を取っているか (33) の違いのみである。これは大きなパラドクスといえるかもしれない。Friends 構文は、直観的には「意味的には複数の存在物が関わっているから述語が複数になる」といいたくなるものである。だがその friends 構文の認可には、意味的に複数を指しうる集合名詞ではなく、形態統語的な複数である普通名詞の複数形が必要とされるのだ。

注

*本研究の成果の一部は科学研究費（若手B:17K18106）による。本稿執筆にあたって有益な意見や母語判断を提供していただいた Juergen Bulach 氏、Jacob Schnickel 氏、Ricky Chi Yan Leung 氏、および建設的なコメントを提供していただいた匿名査読者に感謝する。残る問題や不理解は全て筆者の責任である。

- i もちろん、述語名詞句と主語名詞句のあいだに人称に関する一致関係は見られないという点で、(1, 2) の例と (3, 4) の例を完全に同一視することはできない。
- ii アメリカ英語では、(10) の対応例は一貫して単数一致である（久野・高見 2009：116-117）。
- iii Huddleston & Pullum (2002：513)：“Overall, the cases of mismatches are too prevalent for them to be treated as exceptions to a grammatical rule of agreement holding generally between predicate and predicand [...]”
- iv 同上：“A more satisfactory approach is to provide semantic account of the restricted range of cases where mismatches result in unacceptability of the kind illustrated in [[#]*My daughter is doctors*; [#]*My daughters are a doctor*].”
- v Lakoff & Peters (1969) はこの内的関係と外的関係という解釈上の違いに立脚

して*and*並列を句レベルの等位構造と節レベルの等位構造の二種に分けることを提案している。

- vi Lakoff & Peters (1969) は*alike*のような形容詞述語や、*together*を伴う動詞述語の対称性を取り上げ、名詞述語の事例は扱っていないが、彼らの指摘は本稿の関心にも適用される。Tsoulas (2020) も参照。
- vii (25) の構造において、適切な線形順序を得るためにはVP主要部がそのSpecよりも先行する位置に移動しなければならない。この移動の着地点を仮にF⁰とし、この主要部の投射をFPとしておく。当然、F⁰の範疇が何であるかという疑問が生じるが、ここでは立ち入らない。以降の構造表示も同様。
- viii 匿名査読者が指摘する通り、PISHをNP述語に適用すると、述語NPの内部に主語NPが生起することになり、額面通りに受け取れば、本文で採用している主語NPの移動はA-over-A原理 (Chomsky (1964)) 違反に見える。ただし筆者の知る限り、A-over-A原理の定式化や評価については現在に至るまで意見の一致を見ていない (Bresnan (1976)、長谷川 (2003)、Müller (2011) など)。A-over-A原理をどのように解釈するにせよ、項名詞句と述語名詞句が異なる機能範疇を備え (例えば前者をDP、後者をNPあるいはPredP; 注x参照)、いわゆるNP移動はDPに適用される、と考えてやれば、この問題は回避される。
- ix *And*が示すこのような透明性こそ、等位構造は*and*を主要部とする&P構造であるとする従来の分析案に対してChomsky (2013、2015) が疑義を表明した根拠である。その意味では、本文での&Pという表示は不適切なのだが、表記の簡潔さのために&Pという表示を採用する。
- x 一般に、名詞句が項として機能するためには機能範疇Dが必要だと考えられている (DP分析: Abney (1987)、Stowell (1991)、Longobardi (1994) など)。これに対して、名詞句が述語として機能するためにはなんらかの機能範疇F (本文中でPredPと示唆したもの) ととらえてやれば、名詞句の項としての機能と述語としての機能を並行的にとらえられる可能性もあるのではないか。
- xi この点に関する査読者の指摘に感謝する。Nominal concordやparticipial agreementといった現象をどこまで統語的Agree操作によって統合できるかは重要な問いである (cf. Inokuma (2013))。ただし、本文で述べたような名詞句内部のAgreeを想定しても、メカニズムの詳細については検証すべきポイントが残る。Friends構文の最大の特徴は、同一のspine上に生起する二つの述語 (述語名詞*friends*と繫辞*be*) が、数素性に関して異なる値を付与されるという事実であり、この点において、*friends*構文は一般的なparticipial agreementとは異なる。
- xii このような分析は不定冠詞*a*の分析にも再考を促すが、今後の課題とする。

参考文献

- Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- Bresnan, Joan (1976) "On the form and functioning of transformations," *Linguistic Inquiry* 7, 3-40.
- Carstens, Vicki (2000) "Concord in minimalist theory," *Linguistic Inquiry* 31, 319-355.
- Chomsky, Noam (1964) *Current Issues in Linguistic Theory*, The Hague.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist inquiries: The framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 1-16, John Benjamins.
- Dyła, Stefan and Anna Feldman (2008) "On comitative constructions in Polish and Russian," *Formal Description of Slavic Languages*, ed. by Gerhild Zybatow, Luka Szucsich, Uwe Junghanns and Roland Meyer, 288-299, Peter Lang.
- Freidin, Robert (2012) *Syntax: Basic Concepts and Applications*, Cambridge University Press.
- Fukui, Naoki and Margaret Speas (1986) "Specifiers and projection," *Papers in Theoretical Linguistics: MITWPL 8*, ed. by Naoki Fukui, Tova R. Rapoport and Elizabeth Sagey, 128-172, MIT Working Papers in Linguistics.
- 長谷川欣佑 (2003) 『生成文法の方法 英語統語論のしくみ』 研究社.
- Heycock, Caroline and Roberto Zamparelli (2005) "Friends and colleagues: Plurality, coordination and the structure of DP," *Natural Language Semantics* 13, 201-270.
- Hornstein, Norbert, Jairo Nunes and Kleantes K. Grohmann (2005) *Understanding Minimalism*, Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- Inokuma, Sakumi (2013) "Distribution of ϕ -features within DPs and the activity condition," *English Linguistics* 30, 292-312.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) "The position of subjects," *Lingua* 85, 211-258.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press.

- 久野暲、高見健一 (2009)『謎解きの英文法 単数か複数か』くろしお.
- Lakoff, George and Stanley Peters (1969) “Phrasal conjunction and symmetric predicates,” *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*, ed. by David A. Reibel and Sanford A. Schane, 113-142, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Longobardi, Giuseppe (1994) “Reference and proper names: A theory of N-movement in syntax and logical form,” *Linguistic Theory* 25, 609-665.
- McNally, Louise (1993) “Comitative coordination: A case study of group formation,” *Natural Language & Linguistic Theory* 11, 347-379.
- Müller, Gereon (2011) *Constraints on Displacement: A Phase-Based Approach*, John Benjamins.
- Stowell, Tim (1991) “Determiners in NP and DP,” *Views on Phrase Structure*, ed. by Katherine Leffel and Denis Bouchard, 37-56, Kluwer, Dordrecht.
- Tatsumi, Yuta and Yoshiki Fujiwara (2018) “Splitting a coordination with “with”,” *Proceedings of the Linguistic Society of America* 3, 67:1-12.
- Tsoulas, George (2020) “On a difference between English and Greek and its theoretical significance,” *Syntactic Architecture and Its Consequences II: Between Syntax and Morphology*, ed. by András Bárány, Theresa Biberauer, Jamie Douglas and Sten Vikner, 93-112, Language Science Press.